HITOKOMART No.11

篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

ロシアがウクライナに進攻して1年が経った。今もなお出口の見えない状況が続いている。一部の狂った政治家の感情のままに、一般市民の生活は破壊され、ごく当たり前の普通の生活が消えてしまった。そしてその一番の被害者は子どもたちである。無限の可能性に満ちていたはずの未来に、彼らは今、何を見ているのだろう。

禁じられた遊び

縛る男

昨年の秋にノルウェーの漫画家から漫画を1枚送ってくれないかというメールをもらった。『女性への差別や暴力に反対する』というテーマのもとに世界中の漫画家から作品を集めており、選ばれた作品はノルウェーの国立カートゥーン美術館で展示され、人々にそのメッセージを伝えるという事だった。

自分が本来テーマとして考えることの無かったものであり、締め切りの直前でもあったので、どうするか躊躇したのだが、先方の強い要請に応える形で三〇分ほどで描いて送ったのがこの作品である。

結果的に67か国、261人の漫画家から505点が集まり、30点が選ばれて展示された。日本からは私ともう一人、同じフェコジャパンの横田吉昭氏の二人だけが選ばれた。

この要請がなかったら多分描くことのなかった作品だが、昨今の社会状況を見直してみると、女性へのDV事象は日本でも珍しいものではない。

しかしこういうテーマで一コマ漫画を描いている男性の漫画家を私は知らないしましてやそんな漫画展は見たこともない。

自分の作品作りを含めていろんな事を見直さねばと思った展覧会だった。

腐ったスイカ

ウクライナに関する報道は毎日途切れる事はないがミャンマーに関するものを見る機会は限られている。

国軍によるクーデターから2年が過ぎた今でも人々の虐げられた状況は変わらず、日本国内では毎週のように各地で在日のミャンマーの人たちを中心にした抗議活動や支援の活動が行われているのにそれに触れる事も殆ど無いのが現状だ。

だからミャンマーの人たちの心の中にはこの状況は自分たちだけで解決しなければならないものだという諦めに近い思いが膨らんできているように思われる。

ミャンマーでは緑色は国軍、赤色は民主派を象徴する色だという。

だから表面が緑色で中が赤いスイカは、国軍の中にいるが意識は民主派という人たちの事を指すのだそうだ。

国軍の兵士たちの中には延々と続く国軍兵士の略奪や殺戮行為に耐えきれず、脱走して反政府活動に参加する者や国境を越える者も増えているらしい。

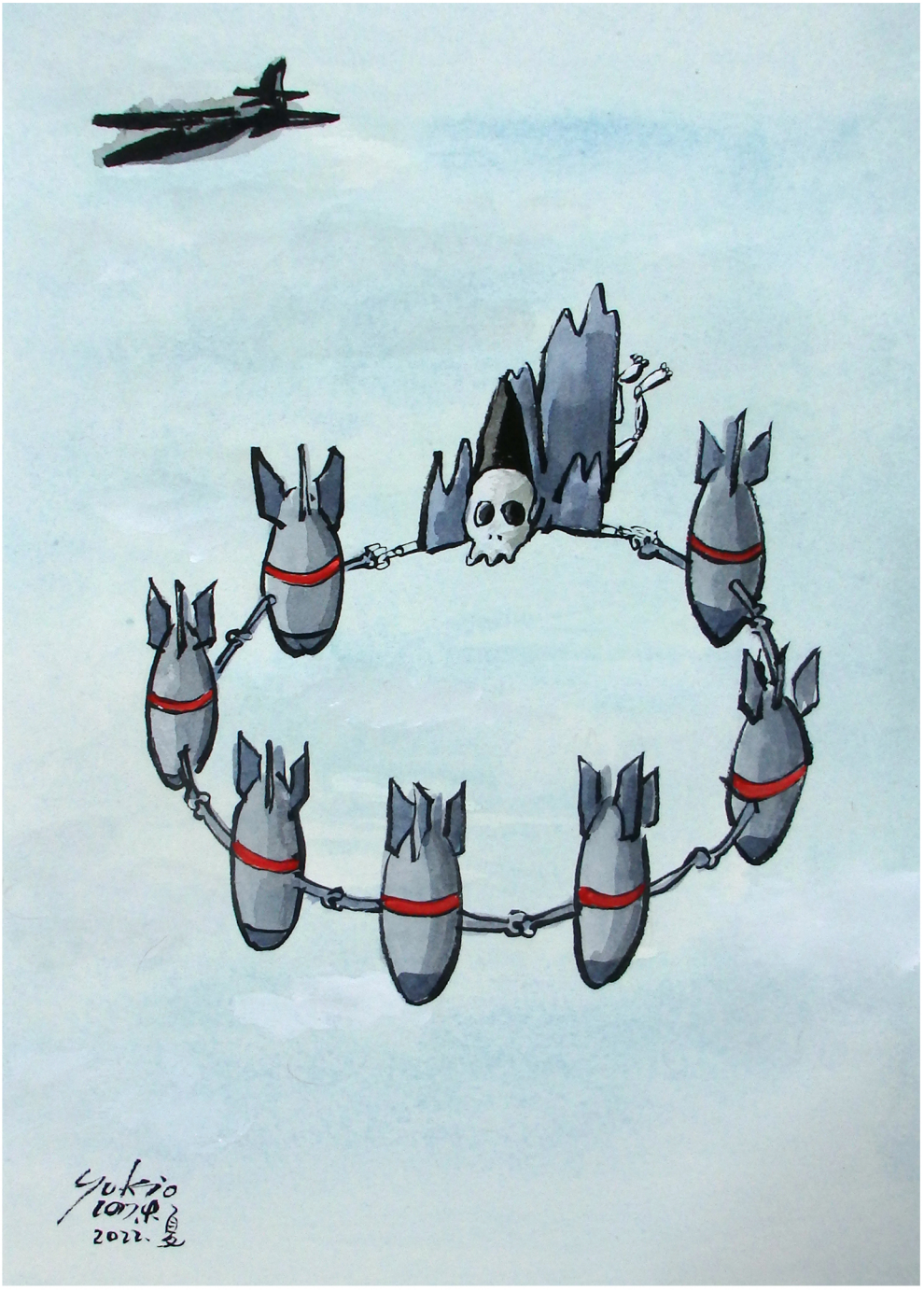
ここに描いたスイカの中は赤ではなく灰色に濁っている。

司令官の帽子をかぶった黒いスイカは骨の髄まで腐りきっている男を象徴している。

そしてみんな
眠くなって…

眠れない時には羊の数を数えるという行為は昔から海外のヒトコママンガの世界では定版の生活シーンとして描かれてきた。
私はいつでもどんな所でも眠れる人間なのでそういう風に羊を数えた事は無いが、世の中には眠れないで悩んでいる人もたくさんおられるから実際にそうされた人たちも多いだろう。
もともとは英語で『sheep』と『sleep』が似ている事が起源らしいから日本語で『ヒツジ』と発音しても効果は無いような気がする。
しかし不思議なことに子供の頃から眠れないときにはそうするものだと聞かされてきた多くの日本人は反射的にその魔法の呪文を唱えてしまうのである。
広々とした草原に散らばる羊たちの姿を目で追いながら、1人たたずむ少年の姿に自分をダブらせるのである。

眠り～ゴーランド



死　神

海外のヒトコマ漫画に描かれる死神は大きな黒いフード付きのマントを被った骸骨である。手には大きく鋭い鎌を持っている。いかにも残忍な殺し屋として描かれる事が多い。
反対に、日本の死神は白髪のヨボヨボの老人である。死装束に似た白い着物を着ている。武器は持っていない。
落語『死神』では決められた寿命に近づいた人間の枕元に座って、その時をじっと待っている姿が描かれている。
静かに命の終わりを見届ける役割のようだ。

家内が癌で亡くなる前、入院中の病室に死神の姿が見えたと言っていた。
霊感が強かった彼女にはそういうものを含めて病院内をウロウロする霊の姿も見えていたと言うのだが、それが病気のせいか夢なのか定かではない。
一度、病室に死神がいると聞いた次女が両手を振り回して「あっちへ行って！」と叫んだらどこかに行ったという事があったらしい。
その夜、隣の部屋の患者さんが亡くなったという話を聞いた時は鳥肌が立った。

もつれる

昔フライフィッシングにはまっていた。始めたのはブラットピットの映画がきっかけだった。
漫画家仲間に釣り名人がいて手ほどきを受けた。市販のフライ（毛鉤）では飽き足らず、自分で毎晩のようにオリジナルのフライを巻いていた。
遠のいたのは仕事との兼ね合いもあったが目の衰えが一番の原因だった。
水面の反射を防ぐ偏光サングラスをかけていても魚の動きが読み難くなった。
川の流れの中に立って釣り糸を結び直したり糸のもつれを解いたりする事にストレスを感じるようになった。
歳を取ったら人は気長になると言われるが、私の場合は生来のイラチは変わらなかった。時間が勿体ないと思うので糸はもつれたらさっさと切り取って捨てるかそっくり新しい物に交換した。
最近は人間関係のもつれもそういうのが一番かなと思っている。
わがままな生活が健康のもとである。